

書 評

阪井葉子著、三谷研爾編
『戦後ドイツに響くユダヤの歌 イディッシュ民謡復興』
(青弓社、2019年)

塚 本 栄美子

本書は、編者の三谷研爾氏が語る通り、著者阪井葉子氏の遺作である。評者には、どこまでが著者の手により、どこからが編者によるのか知るすべはない。だが、読了後の印象は、構成と本文はほぼ阪井氏が仕上げていたのではないかと、いうものだった。それほどまでに、本書は「彼女らしさ」が表れている作品であり、そうした一冊として評していきたい。

まず、本書の最大の魅力は、イディッシュ民謡という主題もさることながら、ホロコーストの記憶を背負った戦後ドイツの人びとが、イディッシュ民謡の発掘や研究、そして歌唱・演奏することで、さらにはその音楽を聴くことで、その過去とどれほど真摯に向き合ってきたかを描写している点である。そのなかには、身近なユダヤ人の影響からイディッシュ民謡に惹かれていったドイツ人の若者もいれば、強制収容所を生き延びたユダヤ人もいる。著者が収集した彼ら自身の証言や近親者の証言は、読む者の心をわしづかみにして離さない。これに触れるだけでも本書には一読の価値があり、ドイツ現代史を学ぶものにとっては必読の一冊である。

本書のメインの構成は以下の通りで、ここに、社会批判と結びついたフォークリバイバル運動の先駆となるワンダーフォーゲル運動とシュタイニツ民謡集、イディッシュ歌手たちに十八番を提供することになったゲビルティグ、西ドイツと異なる道筋をたどった東ドイツのフォークリバイバル運動に関する3つのコラムと、中東欧音楽を専門とする伊東信宏氏の解題、編者三谷研爾氏の「あとがきに代えて」が組み込まれている。

はじめに

第1章 生きること／うたうこと——ユダヤ人の生活のなかの音楽

第2章 ヴァルデック城1964——フォークリバイバルのはじまり

第3章 イディッシュをうたうフォーク歌手たち——贖罪をこえて

第4章 イディッシュをうたう子どもたち——未来のための追想

第5章 アムステルダムから東ベルリンへ——ユダヤ人歌手リン・ヤルダティ

第6章 再統一ドイツとイディッシュ歌謡——クレズマー音楽ブームのなかで

冒頭、読者は、日本でもっとも有名なイディッシュ歌謡「仔牛(ドナドナ)」の歌詞に誘われる。そして、この歌自体はホロコーストをイメージしてつくられたものではないものの、多分にそれと結びつけてイメージされるイディッシュ歌謡が、その加害国ドイツでうたわれるよう

になったのはなぜか、という問いを共有することになる。

第1章で、著者はまず、キリスト教徒からの隔離・迫害の歴史の中でイディッシュ文化をよりよく守り育んできたシュテートルの世界観を、『屋根の上のヴァイオリン弾き』から読者にイメージさせる。そのうえで、近世以降アシュケナジム・コミュニティと音楽との距離が縮まり、やがて19世紀にはイディッシュ民謡が生まれ、フォルクスジンガーが登場してくるまでの歴史を概観する。こうした歴史的背景のうえに、本書の主人公たる、戦後のイディッシュ歌手たちに核となるレパートリーを提供した、二人のホロコースト犠牲者のフォルクスジンガー、ゲビルティグとグリックが紹介される。ナチによるユダヤ人迫害のなかで、一人は亡くなり、もう一人は消息を絶っている。そうした二人の遺した詩がいかにホロコーストの記憶を伝えるにふさわしいものであるのかを、代表作を紹介しながら明らかにする。

第2章では、第二次世界大戦をはさんでアメリカで展開し、戦後東西ドイツに伝わったフォークリバイバル運動に話が移る。とりわけ、最初の頂点たる、1964年のヴァルデック城フェスティバルと、そこに集った第1世代に焦点が当てられる。一般にこの運動の特徴は、忘れ去られていた民謡を掘り起し、そこに政治的・社会的批判を託して歌唱・演奏するものであるが、ドイツではナチのプロパガンダに利用されたドイツ民謡を使うことはできない。ここにイディッシュ民謡の「発見」の意義があった、と著者は気づかせてくれる。

こうしたイディッシュ民謡を積極的に取り入れた人物として注目されるのが、ペーター・ローラントである。彼は、「ナチスの手あかがついていない」伝統歌謡を収集したシュタイニッツ民謡集に着目し、のちにはアメリカでイディッシュ民謡のリバイバルに大きく貢献したユダヤ人フォーク歌手ビケルの影響と、大学のイディッシュ語講師シュプレヒャーとの出会いにより、イディッシュ語の歌をどんどんレパートリーに加えていった。フォークリバイバル運動とイディッシュ民謡の結節点といえる人物である。

そのほかにも、強制収容所収監経験をもつポーランド歌手クリシェヴィチや、夫のほうが両親を強制収容所で失った、ユダヤ人夫婦デュオ、ハイ&トプシなど、自身がホロコーストの悲しい記憶をもつ者たちが紹介され、フェスティバルでうたわれたイディッシュ民謡とそこに込められたメッセージの重みを痛感させる。こうして著者は、1960年代の西ドイツにおけるイディッシュ民謡への関心の広がりや定着を、説得力をもって明らかにしている。

第3章では、フォークフェスティバル最盛期の1970年代の西ドイツで、フォークリバイバル運動第2世代として活躍したジャーマン・フォークバンド、エスベとツプフガイゲンハンゼルを取り上げている。彼らは、ドイツ民謡からイディッシュ民謡へと傾倒していった点で共通する。これは、エスベではガビが、ツプフガイゲンハンゼルではフリッツがイディッシュ民謡の発掘や研究に熱心だったところに負うところが大きく、著者はガビやツプフガイゲンハンゼルのもう一人のメンバー、シュメッケンベヒャーへのインタビューをもとに、二人の取り組みと思いを活写している。

両バンドが社会で広く受け入れられたのは、同時期にアメリカのテレビシリーズ『ホロコースト』が西ドイツでも放映され、過去への贖罪に関心が高まっていたことと無縁ではない。とりわけ、エスペは、各地のシナゴグでもイディッシュ民謡を歌い、ユダヤ人聴衆に受け入れられた。さらに、記述のなかで印象に残るのは、イスラエルでのコンサートの際、腕に強制収容所の囚人番号が刺青されたユダヤ人男性が「封印していたドイツ語」で話したいと申し出てきた逸話である。著者は本章で、第2世代の活動が親世代の蛮行を批判しドイツ人としての贖罪の意味があった、ということをはっきりと示しつつも、合わせてそれを越えて、被害者の心を融解させる力をも持ちえたことを、われわれに教えてくれている。

第4章では、ドイツ人イディッシュ歌手マンフレート・レムに焦点があたる。彼の活動で特筆すべきは、「ホロコーストの犠牲になったゲビルティグの詞と音楽の発掘と演奏に努めてきたこと」と「アシュケナジムの歴史と文化を伝えるため青少年向けの歌謡ワークショップを開催してきたこと」である。ここでも著者は、レム自身のもとに足を運んでいる。彼はのちに妻となる女性を介してローラントのことを知り、イディッシュ歌謡にのめりこんでいく。とりわけ埋もれているゲビルティグの詩と旋律を求めて東奔西走し、さまざまな助力を得て収集した。だが、彼の作品の多くには旋律が残されていない。そこで、レムは自らメロディーをつけることでゲビルティグの詩に息吹を吹き込み、1984年から1988年の間に3枚のLPレコードを制作した。さらに、1992年にはそれまでの成果を集大成するゲビルティグ歌集を刊行した。評者には、これらの営みが、加害者の子孫としての立場を負わされたドイツ人とホロコースト犠牲者の真摯な対話のプロセスとしか思えない。

レムの活動のもう一つの柱、青少年向けのワークショップは、当初はドイツ人の子どもたちだけを相手にしていたが、やがてポーランドの子どもたち、さらにはイスラエル、チェコ、スロヴァキアの子どもたちも含めて行われるようになった。本章では、プログラムとレムへの聞き取りをもとに、その内容が紹介されている。その際レムは著者に2枚のDVDを託している。そのうちの1枚には、大人たちの引きずってきた既成概念を乗り越えて、子どもたちの相互理解が進んだ証が感想という形で収められ、本書でもその一部が紹介されている。著者が発掘した、草の根レベルでの「過去の克服」が行われてきた証拠である。

第5章では、視点が西ドイツから東ドイツに移る。そこでは、東ドイツで唯一の例外として活動し続けた、ユダヤ人イディッシュ歌手リン・ヤルダティが取り上げられる。本章は、まるごと彼女に捧げられ、本書のなかでもっとも生き生きと描かれている。彼女は、アンネ・フランクの死も目の当たりにしたホロコーストの生き残りであり、反米・反イスラエルの東ドイツをも生き抜いた女性であった。その生きざまは、人を虜にせずにはいられない。著者もその虜になった一人である。夫の残した評伝によるだけではなく、娘ヤルダにもインタビューし、彼女の実像に迫っている。

リンは、アムステルダム時代からイディッシュ語の歌の発掘・蒐集に余念がなく、戦後のシ

【書評】阪井葉子著、三谷研爾編『戦後ドイツに響くユダヤの歌 イディッシュ民謡復興』（青弓社、2019年）（塚本栄美子）

ナゴグや難民キャンプでそれらを披露した。スウェーデンの難民キャンプでゲビルティグの作品を目にしてからは、彼の作品も重要なレパートリーとなった。その後、共産党員であった彼女は家族とともに東ドイツへ移住する。親アラブの東ドイツでは、第3次中東戦争が始まると国内での活動は困難になり、代わりに「文化大使」として国外での活動が多くなった。

こうした彼女のレパートリーの中には、ドイツ人歌手が取り組まないものも少なくない。そのなかで特筆すべきものが紹介されている。「わたしは山を見た」である。山とは、マイダネク収容所に残された犠牲者の靴の山である。この歌は、聴く人にホロコーストの歴史を想起させ、彼女も強く持っていたであろう、その怒りを決して忘れない意志を感じさせる。

最後に、生きていれば50歳になるアンネを追悼すべく、リンが企画した「アンネ・フランクのために」というプロジェクトが紹介される。ここでリンは、母に背を向けていた娘ヤルダに、自らのレパートリーからプレヒト作詞アイスラー作曲の「平和の歌」を与え、うたわせる。ユダヤ人の辛い記憶を背負った彼女が、娘に未来へのバトンを渡した瞬間である。

第6章では、「東と西が対等なかたちでドイツ統一がなしとげられた稀有な例」とされる、再統一後のフォーク音楽シーンに焦点があてられる。そのなかで、特に注目されるのは、イディッシュ歌謡を軸に活動が続けた、東独出身のカルステン・トロイケと、リンの娘ヤルダ・レープリングである。前者については、聴衆だったユダヤ人女性サラ・テネンベルクとの出会いが運命的であった。彼女は両親を強制収容所で亡くしたホロコースト・サバイバーで、彼は、彼女が記憶していたイディッシュ語の歌をCD『忘れられた歌』にまとめ、知られていない歌をどんどん世に送った。そのなかには、ある親子が森で熊や狼に出会い、命乞いをし、子どもたちだけが残される、という「スレレ（小さなサラ）」という曲がある。結末はほかされているが、第二次世界大戦時のユダヤ人の運命を思わせる。「ナチスの子孫」たるドイツのフォーク歌手とホロコースト犠牲者である女性の共同作業は、読む者に真の意味での「過去の克服」とは何か、を考えさせる貴重な事例である。いっぽうヤルダは、イディッシュ民謡の起源としての典礼音楽に接近する。これをきっかけに、母リンが距離を置いていたシナゴグで女性ハザンを務めるようになった。

このように再統一後も、ドイツ人やユダヤの血をひく人びとがイディッシュ歌謡やユダヤ文化と真摯に向き合ういっぽうで、ユダヤ人のなかには民俗音楽における純血主義が頭をもたげ、クレズマー音楽ブームのなかでは背後にあるユダヤ人の歴史に関心を持たない者も出てきている。著者は最後にこうした流れに警鐘を鳴らす。「成り立ちからしてドイツ語に近いイディッシュ語の場合、歌詞の意味のなかがしかは、いやでもドイツ人聴衆の耳に入ってくるだろう。イディッシュ歌謡をうたい、また聴く行為は、純然たる音楽の次元にとどまるものではない。この音楽に耳を傾けることは、同時にユダヤの歴史に耳を傾けることである。」まさに、フォークリバイバル運動にイディッシュ民謡の復興を見た、著者の着眼点の秀逸さがここにある。

西ドイツの流れを汲む戦後ドイツの「過去の克服」について、歴史教育や政治教育の実践な

ど、公の関与するテーマについての言説や研究は枚挙にいとまがない。そのおかげで、政治家や学識者、マスメディアなど公けに意見表明のできる人びとの姿勢については、かなりの知見を邦語でも得ることができる。しかしながら、戦後を生きた名もなきドイツの若者たちが、この問題とどう向き合ってきたのか、われわれは必ずしも多くの情報を持ち合わせていない。そうしたなか、本書に示される、流行や社会の矛盾に敏感で音楽好きの彼らが、イディッシュ語の歌の掘り起こしと演奏にかかわり、ホロコーストという過去と真摯に向き合う姿は、読者に民間レベルでの「過去の克服」の取り組みの実態を教えてくれる。これからも終わらない、イディッシュ民謡を通じてのドイツ人とユダヤ人、さらにはそれを取り巻くヨーロッパ、世界の人びととの対話が続くことを評者も祈るばかりである。

内容の紹介についてやや冗長になった。しかしながら、それには理由がある。一つは、著者のセレクトした音楽家たちを順に追っていくことで、イディッシュ民謡復興史を概観できるからである。できる限り名前をあげることで、本書が、邦語での類書がないなか貴重な概説書でもあることを伝えるためである。

もう一つは、著者が誰に会っていたかを随所に挿入し、本書の記述が文字資料にのみ依存するわけではないことを意識してもらうためである。時間的制約もあってか、註にインタビューのことはほとんど記されていない。しかしながら、読者には是非240ページの「インタビュー記録」に並ぶ名前を参照しながら、本書を読み進めてもらいたい。そうすれば、本書が、戦後ドイツの草の根レベルでの「過去の克服」を伝える貴重なオーラルヒストリーであり、著者による「記憶の掘り起こしの所産」である、とお分かりいただけるだろう。

【付記】

追悼 著者の阪井葉子氏は、2013年度、2015年度、2016年度秋学期と、亡くなる直前の Semester まで、本学で非常勤講師として「言語と歴史1」と「言語と歴史2」をご担当くださった。とりわけ前者のクラスは、歴史文化学科の1年生必修科目で、民俗学や文化人類学などインタビューを研究手法とする分野の学生が多く、オーラルヒストリーに取り組んでいた氏に、評者をご担当を強くお願いした。日本をフィールドとする彼らにとって、彼女が持参したイースターエッグや、身に着けて来たフランケンの民族衣装は、他者の文化に対する興味の扉を開き、机上で終わらない研究の面白さを教えてくれるものであった。研究においても教育においても、目の前にいる人に誠実に向き合う彼女の姿勢を、今も尊敬してやまない。ご担当からちょうど半年が過ぎようとしたとき病気が発覚し、その後も闘病を重ねながら教鞭をとり続けてくださった。この場をかりて心から感謝を申し上げ、安らかに永遠の眠りにつかれることをお祈りする。

(つかもと えみこ 歴史学科)

2019年11月18日受理